

2021年3月11日
国立情報学研究所
学術コンテンツ課

2020年度 学術情報流通推進委員会 活動報告

第1期基本方針のもと、2020年度は次の活動に取り組んだ。

(1) 国内ステークホルダーとの協調

- ポジションペーパー及び俯瞰図の作成
2019年度第1回委員会では各ステークホルダーの活動状況報告を行い、第2回委員会(メール審議:3月9日から3月16日)では、各ステークホルダーの活動に係る課題や連携の可能性等をまとめたポジションペーパーを作成し、情報共有を行った。2020年度第1回委員会にて、俯瞰図及び表の取りまとめ方について意見交換を実施し、第2回委員会では、第1期(2019～2021年度)に取り組むべき事項について、重点的に議論した。
【詳細は、資料3-1～3-3を参照のこと】

(2) 国際協調に係る戦略の検討と提言

- arXiv.org の活動支援
 - arXiv.org は、物理学、数学、コンピュータサイエンス等のプレプリントサーバとして、同分野を中心とした研究成果のオープンアクセスとアーカイブを進めている。日本においては、arXiv.org の利用実績が多い研究機関がコンソーシアムを形成してこの取組みを支援しており、国立情報学研究所にて、コンソーシアムの年会費の取りまとめを行っている。
 - arXiv.org の利用頻度が高い国内機関に対して 2020 年の参加意向調査を行い、その結果に基づいて、16 機関の会費の取りまとめと arXiv.org 事務局への支払いを行った。
 - 日本の参加機関を代表して武田委員長が、2020年10月5日～7日にオンラインで行われた Annual Meeting 及び12月14日にオンラインで行われた Member Advisory Board 会議に出席した。
 - Member Advisory Board 会議にて、2022年以降の Membership Plan に関する議論があった。
 - 【会議の議事・資料については、参考資料3-1-1～3-1-2を参照のこと】
 - 今後は、2021年の参加意向について、既参加機関を中心に調査を行う。
- CLOCKSS の活動支援

- CLOCKSS は、世界の主要な出版社および図書館による非営利の共同事業で、電子的な学術コンテンツへのアクセス保障と恒久的保存を目的に、ダークアーカイブ（アクセスが限定されたアーカイブ）を構築している。当研究所は、コンテンツを保持する世界 12 のノード機関の一つとして参画する他、大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）と連携して、CLOCKSS との協議や国内大学図書館の CLOCKSS への参加取りまとめを行っている。
- JUSTICE 会員館を中心に 2020 年の参加意向調査を行い、その結果に基づいて、101 機関の会費の取りまとめと CLOCKSS 事務局への支払いを行った。
- 日本の参加機関を代表して武田委員長が、2020 年 6 月 23 日、9 月 16-17 日、2021 年 2 月 23 日にオンラインで行われた CLOCKSS Board of Directors 会議に出席した。
- 【会議の議事については、参考資料 3-2 を参照のこと】
- 今後は、2021 年の参加意向について、既参加機関を中心に調査を行う。

● SCOAP³の活動支援

- SCOAP³ は、欧州原子核研究機構（CERN）が主導する、高エネルギー物理学（HEP）分野の査読付き学術雑誌論文のオープンアクセスを実現する国際連携プロジェクトである。日本においては、SCOAP³ 対象誌を購読している研究機関を中心に、従来図書館が出版社に支払ってきた購読料を、論文出版加工料（APC）に振り替えることで、HEP 分野の主要な学術雑誌のオープンアクセスを支援している。当研究所は、この支援の取りまとめを行っている。
- フェーズ 3（2020-2022 年）を支援する国内機関を中心に 2020 年の参加意向調査を行い、その結果に基づいて、81 機関の会費の取りまとめと SCOAP³ 事務局への支払いを行った。
- 2019 年度に実施した、高エネルギー物理学分野の研究者コミュニティとの「SCOAP³ 推進のための検討会議」を受けて、論文投稿者の割合が多い機関の追加拠出について該当機関の図書館長等に説明した。この結果、高エネルギー加速器研究機構、名古屋大学、京都大学からの追加拠出があった。
- 日本の参加機関を代表して野崎委員と NII の山地教授が、2020 年 10 月 20～21 日にオンラインで行われた Governing Council 会議（以下、GC）に出席した。
- 【会議の議事については、参考資料 3-3 を参照のこと】
- 2019 年 5 月の GC において、SCOAP³ イニシアティブの範囲を従来のジャーナルから書籍に拡大することが提案され、2019 年 10 月の GC において大学レベルの教科書等の関連書籍 78 タイトルについて進めることが承認された、SCOAP³ for Books パイロットプロジェクトについて、2020 年中に既参加機関宛に関心調査を実施し、2021 年 3 月に参加意向調査を実施する。年度内に調査を完了し、2021 年のジャーナル分と一緒に支払を実施する。

(3) アドボカシー活動の実施

- SPARC Japan セミナー2020 の開催
 - 企画 WG を組織して（主査：林委員），SPARC Japan セミナー2020 を計 3 回実施した。また，講演者の許諾条件に基づいて，動画や講演資料等を SPARC Japan の web サイトで公開した。
【詳細は，資料 2 別紙を参照のこと】
- 海外動向に係る情報発信
 - 2020 年度はトピックの提案がなかったため，実施しなかった。
- 広報物の作成及び公開
 - 年報

2018 年度の英語版を発行した。2019 年度から運営が事業から委員会へと形態変更をしたため，2018 年度をもって，年報の発行は停止することとする。年報には，当期の基本方針，当年度活動内容（セミナーの記録ほか），委員会等の開催記録と名簿，総合年表，SPARC Japan ニュースレター等を掲載しているが，これらの情報は，SPARC Japan の web サイト内で従来も個別に公開されているため，以降も個別公開は継続し，情報公開の仕組みを担保する。
 - SPARC Japan NewsLetter

38～41 号（英語版）を発行した他，42 号～43 号（日本語版・英語版）の発行準備を進めている。NewsLetter には，SPARC Japan セミナーの開催報告の他に，arXiv.org 等国際的なイニシアティブの活動概要も掲載している。
【詳細は，資料 4 を参照のこと】

（4） 学術情報流通の動向に係る調査の提言

- 2019 年度に引き続き，JUSTICE が主導する日本の論文公表実態調査のフォローアップに協力している。
- 2020 年 2 月に，日本の研究機関に所属する研究者の公表論文数，OA 率および APC 支払推定額の調査した「論文公表実態調査報告 2019 年度（公開版）」が JUSTICE web サイトで公開された。

SPARC Japanセミナー2020 実施状況

2021年3月11日

年間テーマ：「学術情報流通の新たな地平：COVID-19を契機とした再検討」

国立情報学研究所 学術コンテンツ課

| 回 | 開催日時 (場所) | テーマ | 企画WG (所属) ◎主査、五十音順 | 講師 (所属) 登壇順 | 参加状況 | | | | | | | | | | 定員 | 動画利用状況 ※2/26時点 | | |
|-------------------|--|--------------------------------------|--|---|------------|----------|-----|-----|-----|-----------|----------|-----------------|-----|-----|-------|----------------|--------------|-----------------|
| | | | | | パート ナー誌 | 運営委 員 | 学協会 | 大学 | 研究者 | 大学図 書館 | 国立機 関 | 出版/ 印刷会 社 | その他 | NII | | 合計 | 動画中継 利用件数 | アーカイブ動 画利用件数 |
| 1 | 2020年10月2日(金) 13:00-17:00 (オンライン開催) | 「研究データ公開：フルオープンと 制限公開の境界線」 | 朝岡 誠 (国立情報学研究所 / オープンサイエンス基盤研究センター) ◎ 池内 有為 (文教大学) 林 賢紀 (国際農林水産業研究センター) 八塚 茂 (バイオサイエンスデータベースセンター) | 【講演者・モデレーター】 池内 有為 (文教大学) 海老沢 研 (JAXA 宇宙科学研究所) 上島 邦彦 (株式会社日本データ取引所) 三橋 信孝 (バイオサイエンスデータベースセンター) 桂樹 哲雄 (農業・食品産業技術総合研究機構 農業情報研究センター(農研機構)) 篠田 陽子 (物質・材料研究機構 統合型材料開発・情報基盤部門) 仲 修平 (東京大学社会科学研究所) 八塚 茂 (バイオサイエンスデータベースセンター) 林 賢紀 (国際農林水産業研究センター) | 0 | 3 | 3 | 54 | 9 | 90 | 67 | 13 | 41 | 20 | 300 | なし | 247 | 645 |
| 2 | 2020年12月18日(金) 13:00-17:05 (オンライン開催) | 「プレプリントは学術情報流通の多 様性をどこまで実現できるのか？」 | 池内 有為 (文教大学) ◎ 安原 通代 (国立情報学研究所) 矢吹 命大 (横浜国立大学) ◎ 山形 知実 (北海道大学) | 【講演者・モデレーター】 河合 将志 (国立情報学研究所 / オープンサイエンス基盤研究センター) 森本 行人 (筑波大学) アントワーン・ブーケ (シュプリング・ネイチャー(日本)) 坊農 秀雅 (広島大学) 引原 隆士 (京都大学図書館機構長) 池内 有為 (文教大学 文学部 専任講師) 山形 知実 (北海道大学附属図書館) | 0 | 0 | 6 | 86 | 7 | 144 | 54 | 0 | 44 | 14 | 355 | なし | 251 | 313 |
| 3 | 2021年2月18日(木) 13:00-17:05 (オンライン開催) | 「初めての研究データ」 | 朝岡 誠 (国立情報学研究所 / オープンサイエンス基盤研究センター) 林 賢紀 (国際農林水産業研究センター) ◎ 八塚 茂 (バイオサイエンスデータベースセンター) ◎ 安原 通代 (国立情報学研究所) | 【講演者・モデレーター】 加藤 斉史 (国立研究開発法人科学技術振興機構) 込山 悠介 (国立情報学研究所 助教) 神谷 信武 (チューリッヒ大学 アジア・オリエント研究所図書館) 三上 絢子 (北海道大学附属図書館) 安原 通代 (国立情報学研究所) 朝岡 誠 (国立情報学研究所 / オープンサイエンス基盤研究センター) 林 賢紀 (国際農林水産業研究センター) | 0 | 1 | 10 | 68 | 11 | 151 | 49 | 19 | 55 | 22 | 386 | なし | 282 | 動画未公開 |
| 2020年度参加状況(3回開催分) | | | | | 0 | 4 | 19 | 208 | 27 | 385 | 170 | 32 | 140 | 56 | 1,041 | 0 | | |

※注

- ・発表資料・ビデオ映像・記録ドキュメント等はウェブサイト(<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/>)で公開している。
- ・2020年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3回ともにオンラインのみの開催とした。
- ・参加者の属性は、参加申込時の申告に基づいている。例えば"NII", "大学"及び"国立機関"に研究者が含まれる。

○ 2020 年度のセミナー参加状況

2019 年度以前の開催方法(会場参加者と動画視聴者の 2 パターン)では、「会場参加者」の属性データを記録していたが、2020 年度は全 3 回ともオンライン開催であったため、使用したツール(Webex Events)の都合上、「参加者」の属性データは取得できず、「申込者」の属性データのみ取得可能だった。

また、Webex Events 以外に、サブツール(第 1 回:LINE LIVE,第 2 回・第 3 回:Youtube LIVE)でのライブ配信も実施したが、これらは申込者以外も視聴可能だったため、参考値。

● 参加者数

| | Webex Events | ライブ配信(※1) | 合計 |
|-------|--------------|-----------|-----|
| 第 1 回 | 247 | 308(※2) | 555 |
| 第 2 回 | 251 | 67 | 318 |
| 第 3 回 | 282 | 65 | 347 |

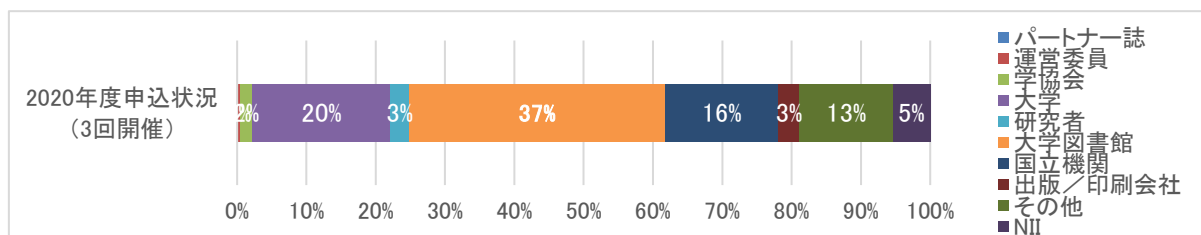
※1;値はユニーク視聴者数。

※2;LINE LIVE は前後半の二部制配信だったため、その累計視聴者数。

● 申込者数

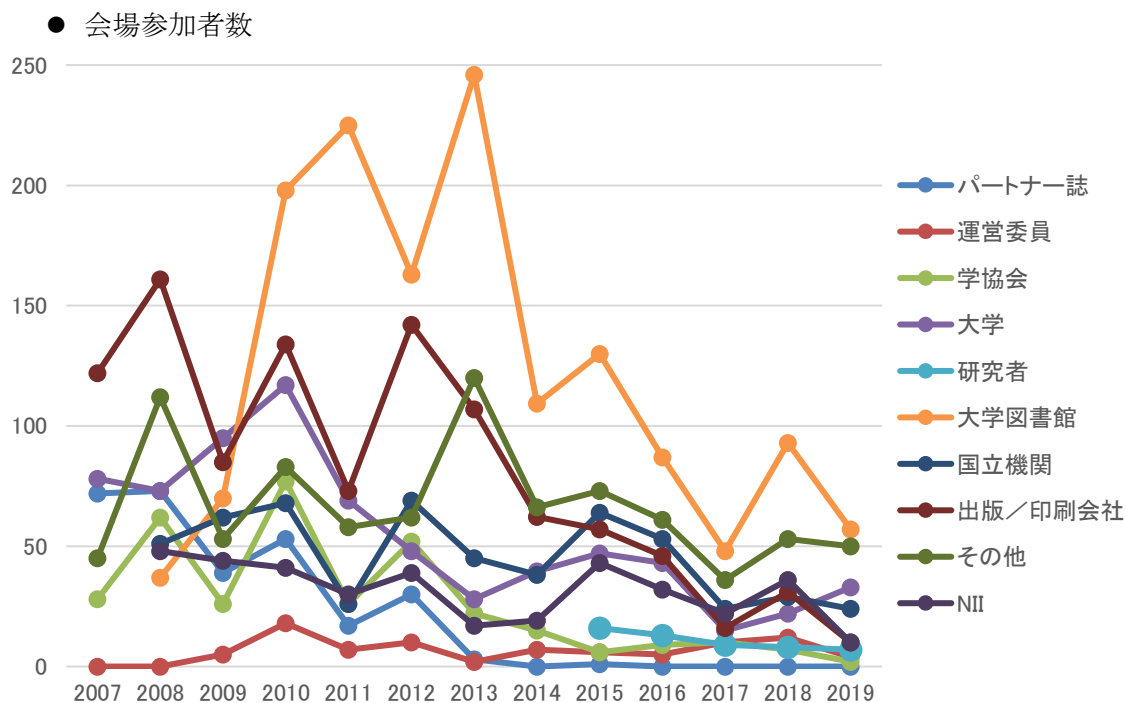
第 1 回:300 名 第 2 回:355 名 第 3 回:386 名 平均:347 名

● 申込者層の割合



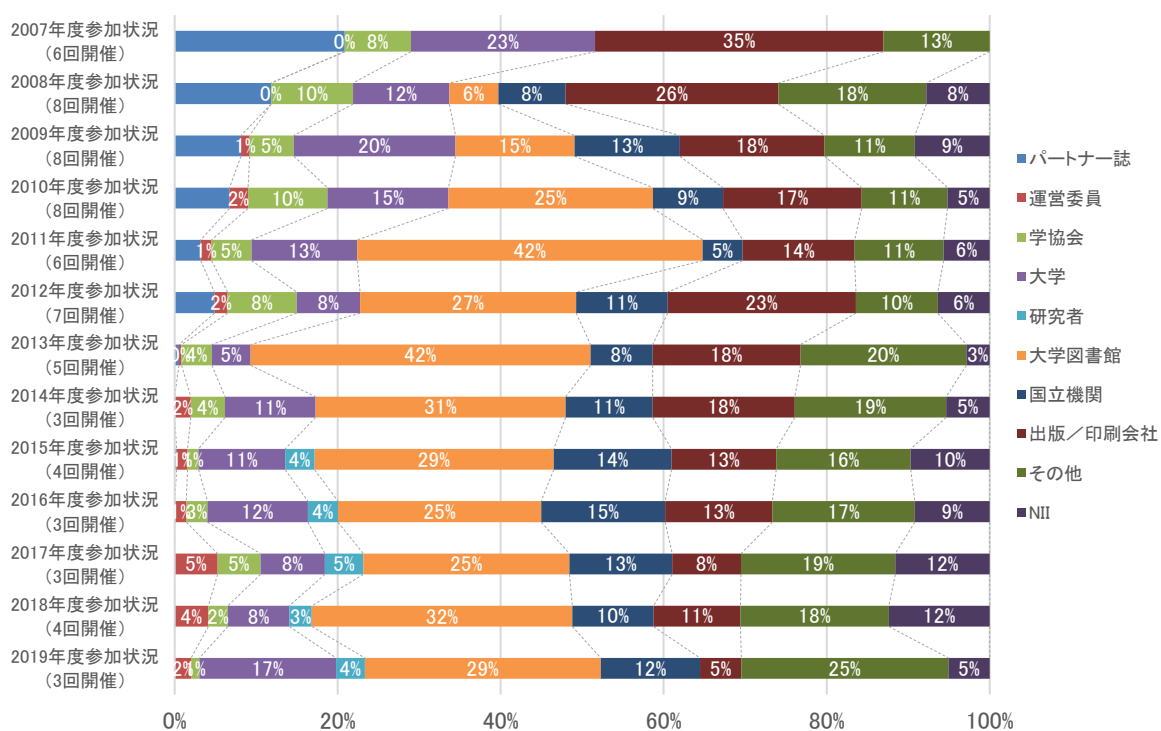
○ 参考:参加者の経年変化(～2019年度)

注)2017年度に定員枠の変更あり。また、2019年度の「特別編」は含めていない。

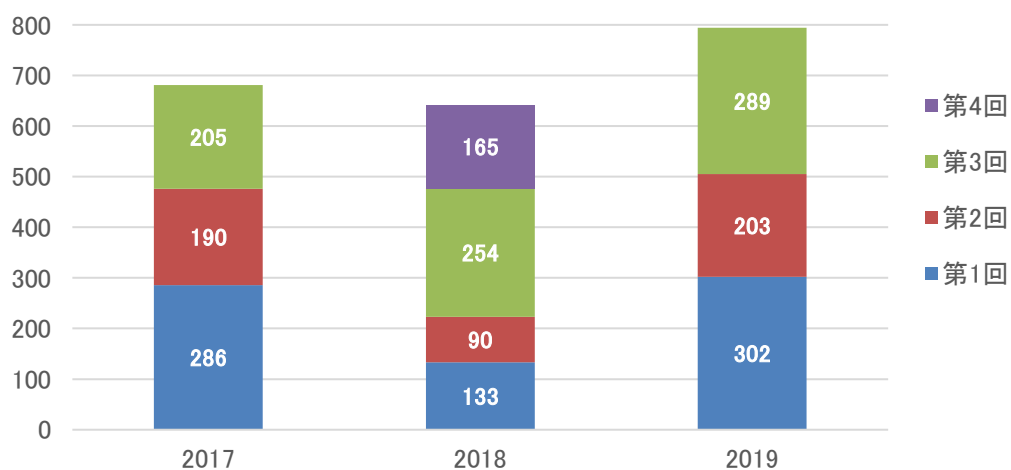


| 1回あたりの平均人数 | |
|------------------|-----|
| 2007年度参加状況(6回開催) | 58 |
| 2008年度参加状況(8回開催) | 77 |
| 2009年度参加状況(8回開催) | 60 |
| 2010年度参加状況(8回開催) | 99 |
| 2011年度参加状況(6回開催) | 89 |
| 2012年度参加状況(7回開催) | 88 |
| 2013年度参加状況(5回開催) | 118 |
| 2014年度参加状況(4回開催) | 89 |
| 2015年度参加状況(4回開催) | 111 |
| 2016年度参加状況(3回開催) | 116 |
| 2017年度参加状況(3回開催) | 63 |
| 2018年度参加状況(4回開催) | 73 |
| 2019年度参加状況(3回開催) | 66 |

● 会場参加者層の割合



● 当日の動画視聴者数 参加者数



2021年3月11日
国立情報学研究所
学術コンテンツ課

SPARC Japan セミナー2020 事務局振り返り

● 企画

- セミナー参加者から、分野横断的なテーマで良かった・今後も取り上げてほしいといった意見が出た（第1回アンケート）。一方で、総合討論を充実させてほしいとの意見もあり（第1回アンケート）、オンラインセミナーにおけるパネルディスカッションの構成、という観点で次年度は工夫をしていきたい。
- 新型コロナウイルスによる業務環境、開催方法の変更の影響もあり、特に第1回セミナーについて、事務局の準備段階のスケジューリングが不十分であった。第2回以降は余裕をもって進めることができたため、次年度以降に活かしたい。

● Slido（すらいど）の利用

- セミナーに双方向性を持たせるために、第3回セミナーでは簡易なQ&A等をslidoで用意した。双方向性という観点では、remoやSpatialChat等、一方的な視聴にならないオンラインツールもあるため、次年度は使用ツールも含めて検討したい。

● オンライン開催について

- 遠方からの移動時間や経費の削減等の利点もあるため、以降もオンライン開催としてほしい旨の意見があった。SPARC Japan セミナーはコロナ前もライブ配信をしていたが、業務自体がリモートになったことによってオンライン参加に対する垣根が下がったのではないかと推測される。
- 今年度のアンケートで開催方法に関する設問を設けたところ、第1回、第2回ともに「リアル開催が可能な場合には、リアル開催を希望する（LIVE中継とのハイブリッドも含む）」の選択者が20%前後、「オンライン開催のみで問題ない」が50%前後、「後日、動画配信があれば、どちらでもよい」が30%前後であった。これらの結果も踏まえ、登壇者や企画WGとも調整の上、開催方法について検討していきたい。
- 今年度は初めてのオンライン開催でもあり、音声不良時の対応や参加者へのアナウンス方法など、運営上の課題が明らかになった。次年度以降は、今年度の反省点を踏まえ、よりスムーズに運営できるよう改善したい。

以上